

I R S A招致をめぐる諸問題について

会長 細谷 昇

I R S A招致に関しては昨年の大会時に十分に議論できないまま、理事会および特別委員会の審議にゆだねられてしまいました。そのこともあるって、岩本会員からいくつかの疑念を述べた意見書が寄せられました。主な論点は、I R S Aと村研との関係、財政計画は慎重であるべきこと等ありました。これらの疑問点は、おそらく岩本会員だけではなく、少なからぬ会員がお持ちのことだと思います。

そこで、この「通信」紙上で、鳥越国際交流委員長のI R S Aと村研との関係についての説明、および特別委員会の基本的なスタンスと審議の状況の報告を掲載して、会員の皆さんのご理解の一助としたいと思います。要点は、

(1) I R S Aと村研とは歴史的経過からして関連はあるが、フォーマルには別組織であること、

(2) したがってかりに日本で開催を引き受ける場合でも、対外的に村研の名前を使わざるをえないことがあるにしても、実質的には村研とは別の組織を作ってそこが計画や運営にあたること、つまり、このシステムは基本的に例年の村研の国内大会と同様だと考えます。

(3) したがってまた村研会員に寄付をお願いすることがあるにしても、強制的ではありえないこと、

(4) 財政計画には慎重な姿勢で臨まなければならず、そのためどがたたなければ引き受けは困難であること、などです。

つまり特別委員会は、昨年度の国際交流委員会から、これこれの条件が満たされなければ日本開催を引き受けることはできないという報告がなされていましたが、その条件が満たせるかどうかを検討する委員会です。ですから、開催を前提とするものでは決してなく、引き受けることはできないという結論も十分にありうるわけです。

また、今年度大会では、総会時にこの問題についてご議論いただく時間をとりたいと思います。その折に特別委員会の審議結果をご報告申し上げ、会員の皆さんのご意見をうかがいますのでよろしくお願ひいたします。